

村落社会研究会創立三〇周年を迎え

今、私が考えていること

川 本 彰

村落社会研究会が、本年、三〇周年を迎える。ここ数年、身体をこわしてから、すっかり出不精になり、村研にも御無沙汰ばかりしていたせいで、三〇周年という言葉をきいて、いささかがくぜんとしている。私自身も、いつの間にか老境に入ったことを今さらながら思いしらされ、痛棒をくらった感じである。

ふり返って研究会の活動をみると、すでに既刊の年報が二六冊、毎年、その年度のテーマをきめ、課題研究の成果が発表される。毎年刊行される年報テーマを概観すれば村研としての時代認識とそのうつり変りがわかる。

1. 村落研究の成果と課題 (昭二九)
2. 農地改革と農民運動 (昭三〇)
3. 村落共同体の構造分析 (昭三一)
4. 農村過剰人口の存在形態 (昭三二)
5. 戦後農村の変貌 (昭三三)
6. 村落共同体論の展開 (昭三四)
7. 政治体制と村落 (昭三五)
8. 農政の方向と村落社会 (昭三六)
9. 農民層分解と農民組織 (昭三八)

10. 村落の変動 (昭四〇)
11. むらの解体 (昭四一)
12. むらの解体 (昭四二)
13. 村落構造変化の推進力 (昭四三)
14. 村落社会変化の推進力 (昭四四)
15. 村落社会の変動 (昭四五)
16. 村落社会研究の方法 (昭四六)
17. 村落社会研究の方法 (昭四七)
18. 日本社会における村落と都市 (昭四八)
19. 現段階における都市と農村の対立の諸形態 (昭四九)
20. 日本資本主義と家 (昭五〇)
21. 日本資本主義と家 (昭五一)
22. 村落生活の変化と現代 (昭五二)
23. 村落生活の変化と現代 (昭五三)
24. 農村自治 (昭五四)
25. 農村自治 (昭五五)
26. 農村自治 (昭五六)

以上、二六冊、村研がいかに戦後における農村変貌と取りくみ、その時代的課題に答えようとしてきたか、その姿勢が明かである。しかし、果してよく答えてきたか。また、きたるべき社会のあり方を農村研究を通じて示唆してきたか。こうとわれるといささか心もとない。もちろん、学問は日々の現象追隨にあけくれるものではない。しかし、それは高踏派のデスク・ワークでもない。われわれは

現実にいきている農業、農村、農民の問題を通じて客観的事実に迫ろうとするかぎり、農業、農村、農民が現代社会とのかかわり合いのなかで、感じている痛みを自分の痛みとして、その中から学問的事実を汲みとらねばならないと思う。

今、私が考えていることは、既成の常識がいかに、現代農業、農村、農民の痛みを理解するのに迂遠になってしまったかということである。既成の理論は現実の後追いにあけられているくらいがある。われわれは今こそ、われわれの想像力、すなわち、創造力をフルに働かせ、新しい現実理解の学問体系を築く必要がある。

われわれ農村研究者が、農村研究に真面目にとりくめばとりくむほど、動かぬ農村に焦燥を感じ、自分を第三者的立場に無意識の中においてしまう。しかし、そのとき、われわれは既成の常識のとりことなっている。私自身を自戒する意味で、こういう好例としての夏目漱石をみてみよう。

漱石は当時無名であった長塚節の才能を発見し、大新聞「朝日」の小説を彼にかかせた。『土』がその小説である。しかし、その小説『土』は冗長、難解で悪評をきわめた。漱石はそれを無視し、ついにそれを完成させ、それが単行本になるや請われて序文をかいた。有名な序文である。漱石の節に対する好意、評価は大であった。しかし、その序文の文章は今からみると誤解にみちている。農民生活を蛆虫のごとき哀れな生活と規定してしまったのである。しかし、『土』の蛆虫の如き貧農勤次の夫婦愛がいかに美しいか。それは漱石の『道草』における漱石夫婦の地獄図と比較してみれば明かであ

る。漱石は日本最高の作家であった。彼が農民世界を蛆虫のごとしという。農村生活の評価がここに決定した。

しかし、当の漱石は根っからの江戸っ子。親友正岡子規の証言によると漱石の家の近所にある水田に生えている草、すなわち稲をしらなかつたという。漱石は幕末の生れ、それにしても、すでに都市と農村はかくまで隔絶していた。明治初期においてこの仕末である。農業国日本のからくりはどうなっていたのか。農村はなぜにかくの如く人外の境であらねばならなかったのか。日本近代の不可解を、とく鍵はどこにあるのか。既成の理論をさておき、われわれはもてる想像力をフルに發揮して、この難問に向わねばならぬ。こう私は今、真剣に考えている。